

卒業論文の要旨

論文題目	Kazuo Ishiguro の作品における記憶/ノスタルジー <i>The Remains of the Day</i> (1989), <i>Never Let Me Go</i> (2005), <i>Klara and the Sun</i> (2021) を比較して
氏名	若山祐実
メジャー	哲学
<p>(要旨) 2017 年のノーベル文学賞を受賞した日系英国作家カズオ・イシグロの <i>The Remains of the Day</i> (1989, 邦訳『日の名残り』)、<i>Never Let Me Go</i> (2005, 邦訳『私を離さないで』)、<i>Klara and the Sun</i> (2021, 邦訳『クララとお日さま』) の三作品を取り上げ、作中の社会構造や語り手の特質、記憶とノスタルジーというテーマについて比較を試みた。</p> <p>各作品の語り手は、執事、臓器移植のドナーになるクローン、子どもに仕える人工知能で、いずれも社会的に力を持たない被支配者であり、かつ他者を「ケアする」役割を持っている。彼らはその「ケアする」役割を果たす中で、それぞれ、その肩書きや臓器、心を搾取されている。本稿では、作中世界における何がこのような搾取の構造を支えているのかを、外的な理由と語り手の内面の双方向から考察し、それらが語り手に与える影響や作品ごとの変遷をまとめた。また、三作品の語り手の共通点として、彼らが「古い」と「死」に近づく時期にあることを挙げ、そのことがイシグロ作品の主要なテーマと言われている記憶・ノスタルジーとどのように関係しているか、それらの持つ意味合いが三作品の中でどのように変遷してきたかを考察し、イシグロの記憶・ノスタルジーの表象は、作品を経るごとに肯定的なものへと変化していることを明らかにした。さらに、『私を離さないで』の中に登場する「ポシブル」という概念を起点として、三作品それぞれの語り手に別の人生を歩む「可能性」はあったのか、イシグロ作品における人生の可能性、すなわち、「あり得たはずの人生」や「第二の人生」とはどのようなものかを考察した。</p> <p>以上の比較と考察を経て、イシグロはこれらの三作品において、近年の作品になるほど作中の搾取構造を苛烈なものへと先鋭化させることで人間にとって心とは何か、記憶と心はどのように関係するのかという問いをより鮮明にしていること、また、記憶・ノスタルジーについては、単にそれらの不確かさに焦点を当てるのではなく、それらの持つ可能性や肯定的な意味を示唆する方向へ向かっていることが明らかになった。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>現代英国作家カズオ・イシグロの作品の中でも、特に知名度、人気ともに高く、代表作とも言える三作品を取り上げ、もはやイシグロ作品の代名詞ともなっている「信頼できない語り手」の問題や「記憶とノスタルジー」のテーマについて、真正面から挑んだ意欲的な論文である。多くの先行論文や新聞、雑誌、インターネット等の記事にあたって広範なリサーチを行う一方で、作品を丹念に精読し、借り物でない自らの着眼や分析を着実に積み上げることができた点を評価したい。三作品を横断する特質や作品ごとの変遷をよりインパクトのある形で示すために、敢えて作品ごとの章立てとせず、テーマごとの章立てとすることにこだわったため、各作品のストーリーや登場人物の説明に若干のぎこちなさや不明瞭さが残った部分もあるが、各章の議論を有機的につないで発展、深化させ、説得力のある結論を導くことができた。</p>	